

(資料)

ヘルムート・ケーニッヒ：

フリードリッヒ・フレーベルと、19 世紀前半における
小市民民主主義との結びつき 第一部 翻訳

勝 山 吉 章*

1. フリードリッヒ・フレーベル—古典的市民教育者、小市民民主主義的代弁者

フレーベルは、封建制から資本主義への社会的大変動過程の真ん中にいた。その過程では、ブルジョアジーとプロレタリアートが中心階級として形成され、両者の間では、小市民階級が活動した。我々が小市民階級とみなすのは、小商品生産者（手工業者、自営業者、小商人、中小農業者）と、インテリの多数派（医師、弁護士、芸術家、学者、エンジニア、技術者、一部の会社員、教師もまた）である。フレーベルは、この社会的大変動過程を、広範に広がった、矛盾だらけの小市民民主主義的運動の立場から、フレーベルの政治的な主たる活躍舞台だった教育界で、手助けした。この大変動過程は、目的にはいたらなかったとはいえ、ドイツにおいて 1848/49 年の市民民主主義的革命において頂点に立った。彼は、19 世紀前半の社会情勢や階級闘争に相応した小市民民主主義の特徴をもつ古典的市民教育学の歴史的伝統のなかで体現される。彼の、家庭や幼稚園からはじまる、発達に即して教育する人間陶冶は、教育領域における彼の時代の小市民民主主義的イデオロギーの反映だった。

それは、とりわけ、小市民階級や増えつつあるプロレタリアートや田舎の貧者の子どもたち—それ故、勤労大衆の子どもたちにフレーベルが向き合ったことで明らかだった。

* 福岡大学人文学部教授

の兄クルストフへの手紙でフレーベルは1809年に次のように書いた。「少なくともペスタロッチの名前が意味することは、農夫や郷土人、大衆の友だということ…彼は思考し、行為すること全てにおいて、何よりも、最も虐げられている人、最もうち捨てられている人、最も貧しい人のことを考え、常に、いかにして彼が教訓と授業によってそのような人を救えるかを思案していた」。バート＝ブランケンブルグにあった彼の「遊びと作業の教育舎」1839年夏の出席者名簿に記載されている合計86名の子どもたちのうち、判明した限りでは、彼らは、たいていは小市民階級とくに手工業者や労働者の子どもたちであり、教区監督や荘園書記の子どもたちは例外だった。1844年に彼が出版した有名な『母の歌と愛撫の歌』でフレーベルは、写実的な表現で最も幼い子たちに、小商品生産者や他の中間層の労働や生活に馴染ませようとしたし、「よちよち歩きの子どもを、洞察の生活や生業の生活へ」導こうとした。ディースターベークは、1849年7月に、フレーベルと個人的に面識を得たとき、フレーベルがどのように、次のような子どもたちと遊戯をしていたかを述べた。子どもたちは「たいてい、粗悪な衣服をまとい、一部はボロを着て、裸足だったり、頭巾がなく不完全な身なりをしており、田舎の貧しい居住者の肖像を」呈していた—おそらく、田舎の貧民の子どもたちだけでなく、シュワイナの紡績工場朝5時から夜8時まであくせく働かされていた、周辺の村々のプロレタリアートの子どもたちもだろう。

フレーベルの小市民民主主義的な古典的市民教育学の変形を、我々は、ディースターベークやヴァンダーのもとで、政治的に断固とした表出において部分的に見いだすが、フレーベルが、直接的にも間接的にも、小市民民主主義的運動や、彼に多かれ少なかれ影響を及ぼしたその運動の代弁者の個々人と結びついていたことを考慮するなら、理解できるのである。それ故彼は、次のような嫌がらせや迫害にさらされた。それは20年代にはじまり、他の諸国にもひろがった1851年のプロイセン幼稚園禁止令において頂点に達した。

東ドイツ教育科学アカデミー文書館や、バート・ブランケンブルクのフレーベル博物館にあるフレーベルの遺稿、とくに彼の通信を、より一層解明することに関連して、日常の研究の成果を先取りしようとは思わないが、「フレーベルと小市民主義」という問題性について、若干の註釈が最初の成果としてなされよう。

2. ドイツにおける市民的変革が始まる時期の愛国的反体制的運動に対するフレーベルの関係

まず、フレーベルが教職に就いた時期（1805）から、20年代にカイルハウ学園を設置し校長となるまでに関するフレーベルの自己証言や若干の事件が、あげられるだろうが、それらは社会的発展に分類されよう。最初に、彼が、ホルツハウゼン男爵家庭教師時代に、不名誉な扱いを受けたことから、「貴族の存在と生活を悪そのものとして」憎しみを始めたことが参照されよう。1816年に彼は次のように回想した。

「私の恐れ、私の嫌悪、私の自制、彼による侮辱的扱いについての私の感情……私は、人間として、思想家として同等に扱われたかったのだが、今や、下僕、従属者となった」。

彼によって愛されたカロリーネ・ホルツハウゼン貴族婦人でさえ、ある日、彼に「主従関係」を感じさせた。「私の失望、私は、内心では、彼女の夫と同等だと思っていたのに、部下や下僕のように扱われた」。ブルジョアジーについて、彼は少なからず軽視しながら、例えば1820年に次のように言った。「資本家や富者の教育要求は、労働者や手工業者階級のそれのように、差し迫ってはいないので……」。フレーベルは既に1809年に、「社会変革なくして」、何ら教育において改善は達成されないことを認識していた。1829年に彼は回顧して、対ナポレオン外国支配闘争への参加を通して、彼の「努力が国民(Nation)の方向へ向いた」ことを告白した。そのことは既に、1813年11月9日の彼の戦陣日記への書きこみが証明している。

「この戦争は、個々のドイツ諸国相互の関係に関して、どういう影響を及ぼすのだろうか？ 以前は、諸国は孤立した一国か、せいぜい、互いに組織化されずに結びついていたが、未来は、諸国は一つに組織化され、組織化された全体に結合されるだろう」。

愛国者、詩人、作家そして教育者であるエルンスト・モリツ・アルント(Ernst Moritz Arndt)が1805年に著した著作『人間教育断章(Fragment über Menschenbildung)』を、フレーベルは1806年に読んだが、それは彼の「教育のバイブル」となった。ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』を、彼は、刊行年（1808年）にもう感激し

て読んでいた。そこに含まれたペスタロッチ理念の宣伝、彼のペスタロッチとの個人的交流、そしてペスタロッチ理念とともにペスタロッチの下で、活動している「プロイセンの弟子たち」は、とりわけ、ゲッチンゲンでの数学的自然科学的研究へのあらゆる没頭にもかかわらず、彼の「主目標」を、常に教師になることに向けさせることに貢献した。その際、彼の目は、彼が補足したように、「脇目もふらず、まず何よりも、ベルリンやプロイセンに向けられていた」。なんと言っても、彼は、ベルリン大学で、鉱物学研究とくに結晶学研究に没頭していたのみならず、フィヒテやシュライエルマッヒェアーをも受講していたことが示されよう。フレーベルはベルリンに到着して10日後には既に、全く面識のなかったペスタロッチ主義者ヨハン・エルンスト・プラーマン(Johann Ernst Plamann)博士の学校で授業をはじめた。この学校は、当時、「愛国的教師や国民教育的活動のセンター」となっていた。1813年、彼はリュッツオー義勇軍に志願し、そこで愛国的戦士として自己証明した。

ここに記されたフレーベルの言葉や事実は、市民的改革期で対ナポレオン外国支配闘争の時期(1807~1815)にあり、また、貴族政の政治的復興という制約下で資本主義が一層発展する時期(1815~1830)にあり、それ故、ドイツにおける市民的変革の始まりの時期にある。フランスによって占領されたドイツ領に、一定の進歩があったというなら、それと同様に、ナポレオン外国支配は否定的な影響を及ぼしただろう。というのも、ナポレオン支配は：

「その社会発展の傾向と(対立したからだ一筆者)。この傾向とは、ドイツの土壤で、国民的な市場形成へと、資本主義的国家や市民的国民国家の構築へと向かうものであった。このような客観的法則性に、民族の独立を求める社会経済的、政治的諸要求が相応した」。

1807年と1815年の間は、ブルジョアジーはまだ未発達だったので、市民的改革や対ナポレオン外国支配闘争の頂点には、自由主義的改革者、すなわち進歩的な考えをもつ貴族的党派や市民的知識人層の代弁者がいた。教育制度の分野では、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの改革が始められた—1810年のベルリン大学の創設、ペスタロッチのもとへ徒弟の派遣、ヨハン・ヴィルヘルム・ジューフェルンやルードビヒ・ニコロヒウス(Ludwig Nicolovius)の計画が、それに対する明瞭な表出だった。

疑いなく、プロイセンで生じた改革、とくに教育制度の領域でのそれは、フレーベルの目をベルリンへと向けた。1812年12月、彼は自分の以前の生徒カール・フォン・ホルツハウゼン(Carl von Holzhausen)に次のように書いた。「プロイセン国は、それでも、あらゆる場合に、私が将来にわたって留まり、働くであろうところに思えます」。ベルリンに到着後、フレーベルは指導的愛国者たちの目にとまった。彼らは「ドイツ同盟」(deutscher Bund)という秘密組織に結集しており、研究文献によると、「フランス優位を打破するために、ドイツ共和国を設立すること、そのためには、成人を再教育したり、有為な青年を教育したりすることによって、この共和国の有益な市民をつくること」を目標にすえていた。この同盟のリーダー層に、フリードリッヒ・ルードビッヒ・ヤーン(Friedrich Ludwig Jahn)、フリードリッヒ・フリーゼン(Friedrich Friesen)、ヴィルヘルム・ハルニッシュ(Wilhelm Harnish)がいた。同盟は、市民的ドイツ国民国家設立のための前提条件として、外国支配からの解放を目指す政治的綱領をもっていた。例えば、ヤーンの著作『ドイツの国民性(Deutsches Volkstum)』や、盲学院の地理学教授で校長ヨハン・アウグスト・ツォイネ(Johann August Zeune)―彼のところでも、フレーベルは学んだ―の著作『ゲルマンの始祖トウイスト神、ドイツ統一について』のなかにみられる。同盟は、ハルニッシュの著作「とくにペスタロッチ主義に基づくドイツ国民学校」や、同盟の依頼で、当時のベルリン大学総長ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテに手渡したフリーゼンの意見書「ドイツ・ブルシェンシャフトの組織と開設」のなかで、市民民主主義的国民教育プログラムを所持した。ヤーンによる体操場の設立によって、解放戦争に向けて青年を準備するための実践的な手段が生み出され、それは、リュッツォー義勇軍とともに、計画されたドイツ国民軍の基礎となるはずだった。この義勇軍結成には、上述した者たちがリーダーとして参加した。全てのこれらの取り組みは、「民族的自己主張のイデオロギー的表現」としてのドイツ至上主義の特徴をもった。それは同時にナショナリズムの特徴をも内包した。ヤーン、フリーゼン、ハルニッシュは、進んだ愛国的教育者であるとともに、フレーベルと同様にプラーマンのもとでも活動した。政治的陰謀を理由に、同盟のメンバーの数が減少した。しかし、潜在的同盟者はいた。そのような者にフレーベルは疑いなく属した。フレーベルについてヤーンは、彼の体操者の一人、すなわちミッテンドルフに教えた(ランゲタールも体操者だった)。だからヤーンは、フレーベルを知っていたのだ。それ故、ヤーンがフレーベルをリュッツォー軍に紹介し、彼をランゲタールに引き合わせ、ランゲタールが再びフレーベルをミッテンドルフやカール・パウアーに引き合わせたのは

単なる偶然ではなかったことは確かだ。カール・バウアー(Carl Bauer)は、後の1824年に、教師としてカイルハウのフレーベルのもとに馳せ参じ、それからベルリンのギムナジウムの教授となった。プラーマンのところの数学教師で元砲兵隊下士官のヤコブ・フリードリッヒ・マルクヴォルト(Jacob Friedrich Marckwordt)が、ランゲタールとミッテンドルフをドレスデンに案内した。マイセンでは、リュッツォー義勇軍の、約20名のベルリンの学生たちのコンパが催されたが、それを率いたのが、詩人で後の解放戦争史編纂者フリードリッヒ・フェルスター(Friedrich Förster)だった。そこで、フレーベルとランゲタールとミッテンドルフとバウアーが同時に出会った。出征中、フレーベルはこれらの友人たちと、教育舎で実現する自らの国民教育を論じた。

体操の設立者、ドイツ同盟のリーダー、そしてリュッツォー義勇軍の創設者の一人であるヤーンと、フレーベルや彼のカイルハウの友人たちの間には、1840年代まで友好的な結びつきがあった。1813年のゲールデ(Göhrde)の闘いの後、ヤーンはアイゼレン(Eiselen)への手紙ではっきりと、マルクヴォルトやフレーベルさらに4名のリュッツォー義勇兵が元気であることを述べた。「わが愛する戦友」との宛名書きで、ヤーンは1828年6月12日にウンストルートの流刑地フライブルクからフレーベルに手紙を書き、そのなかで彼は、彼の妻のきょうだいが、体操者アイゼレン、クレーデン(Klöden)、マルググラーフ(Marggraf)と親しく、こんどカイルハウを越えて旅するのだが、それを手助けすることをお願いした。ヤーンは一検閲に対する警戒からか、フレーベルと彼の結びつきを強調するためか(?)—「F.L.J.nah」と署名した。1833年、ヤーンはある手紙で、「かつてカイルハウのフレーベルのところで体操をした」カール(エリアス)・シェプパッハ(Karl(Elias) Schöppach)を「勇者のなかの勇者」と呼んだ。彼は1823年から1827年まで、カイルハウの生徒であり、授業を行う見習でもあり、貧しい境遇の出身者だった。彼をどう育てようと思ったのかという質問に対してフレーベルは、「彼が知り、理解したことを、彼自らが正しく、自ら為すことを考え、為さねばならない」と答えた。他のところでフレーベルは、これとの関係で彼にとってあらゆる職業は同様に重要であることを述べた。

「私の職務を実施するために、安いお金で、素敵で長持ちする衣類を、信念でつくってくれる仕立屋は、十分に尊敬に値するし、職責について、私に教えてくれ、その職責を果たしてくれている」。

1834年ヤーンは次のように述べた。フリードリッヒ・フェルスター(Friedrich Förster)は、「ルードルシュタット近郊カイルハウの古いリュッツオー者たち：フレーベル、ランゲタール、ミッテンドルフ、ベッツシュタイン(Wetzstein)のなかで、若々しく活躍している。シェップパッハ(Schöppach)は、好意をもって、カイルハウ学園誕生から今日まで中止されることのない体操生活にまらめこまれた」。1843年10月13日、ヤーンは「カイルハウ者は、また、バーロップとともにそこにいる」と書いた。ヤーンは、彼の息子の一人を、教育のためにカイルハウに送ることを意図した。数十年来、フレーベルや彼の同志と、最初は投獄され、後に追放されたヤーンとの交友が続いた—ヤーン、彼はブルシエンシャフト発生に参加したのだ。プロイセンの閣僚シュックマン(Schuckmann)が、ヤーンは「一般ドイツ・ブルシエンシャフトの実際の提案者であることがわかった」と証言したのは間違っていない。

ベルリンでの学業の再開後、ミッテンドルフとランゲタールは、1815年に、新に設立されたブルシエンシャフトに加盟した。このブルシエンシャフトは、また、当時の総長、すなわちシュライエルマッヘアーによって支持された。ランゲタールとミッテンドルフは、ブルシエンシャフトでリーダーとして活動した。ブルシエンシャフト運動とは、1815年来の貴族政復活後、「1817年のワルトブルク祭で市民的反対運動として、最初の国民集会や組織を」生じさせたグループ運動化の一つだった。ミッテンドルフ、ランゲタール、リュッツオー者クリストフ・ベッツシュタイン(Christoph Wetzstein)ならびにハレ出身のブルシエンシャフトのリーダー、ヨハネス・アーナルド・バーロップ(Johannes Arnold Barop)は、カイルハウでフレーベルの最も親密な同志となった。

カイルハウでのフレーベルの活動と、20年代にはじまる迫害を、正しく評価しようとするなら、一般的社会的関係ならびに特殊個別的关系を考慮しなければならない。バーロップが、「ブルシエンシャフトに向けられた有名な迫害」に言及して、「1815年の精神は、この学園では具現化されていた」と述べたことは、全く正しい。このこととの引き合いに出される第1は、ヤーンの「国民主義」やフィヒテの「ドイツ国民告ぐ」に強く共感しているフレーベルの6つのカイルハウ小論文集における、市民民主主義的国民教育に対するフレーベルの理論的見解であり、とくに発達に即して教育する人間教育の論文であった。第2は、教育舎での実践的教育であり、第3は、そこで活動している教師だった。カイルハウ学園を支配していたのは、「Burschenturner(ブルシエン体操者)」だった。それは、ヤーンの言い回しで、活動的な体操者とブルシエンシャフト者を表現するもので、彼らの

なかには少なくないリュッツオー義勇兵がおり、ユリウス・フレーベルの回想によれば、「そのリーダーは、たびたび、我々のところに入りました」。

カイルハウの教師や生徒たちの証言によれば、カイルハウでは、対ナポレオン外国支配闘争の回想のなかで、そして、封建的絶対主義的復古政治に対して向けられる、市民的国民的意識の成長への努力との関連のなかで、授業や教育が行われた。クリスティアン・エドゥアルド・ランゲタル(Christian Eduard Langethal)は、1816年からフレーベルの生徒だが、カイルハウ学園について次のように書いた。「ここでは、まだ、解放戦争の日々の真新しい空気が吹いていて、精神と身体を強めてくれた……」。この精神は、他の生徒の証言によれば、「フレーベルや彼の同志の賢明で目的意識的な教育によって、彼らの生徒のなかでうまく目ざまされ、育てられた」。さらに、「教師たちは……私たちに戦役の断片を」語ってくれ、そして「散歩や旅行では……自由の歌、戦争の歌、ドイツの王侯を嘲笑する歌」が歌われた。ヤーンの影響は、とりわけ強かった。「体操は、われわれによって、宗教のように行われた」と、ユリウス・フレーベルは述べている。さらに、夏にはヨーロッパの監督下で水泳が、冬にはスケートが、短期ではなくあった。「フレーベルと彼の戦友が所持していた解放戦争由来の小銃」による射撃訓練でさえ、欠けてはいなかった。「フレーベルと彼の子どもたちの風貌は、当時のヤーンの体操主義者の特徴をもっていた。つまり、教師と生徒は、亜麻織りの衣服を着て、クビをむきだしにして歩き、長髪をたらししていた。彼らの居住は、食事と同じくらい質素で、欠乏と鍛錬がスローガンとみなされた」と、Ch.E. ランゲタルは、回想で述べている。ユリウス・フレーベルが、「一般ドイツ教育舎」を、「当時の革命的精神の温床」と呼んだことは、全く間違っていた。

1819年にイエナのブルシェンシャフト者カール・ルードビヒ・ザンド(Karl Ludwig Sand)が、ツァーリズムのエージェントで反動的作家フォン・コッツェブエ(von Kotzebue)を虐殺したとき、反動はそれをチャンスに、1819年の、いわゆる扇動家迫害を決めたカールスバード決議によって、あらゆる進歩的勢力に対する狩り出しをはじめた。その狩り出しは、ベルリンのフレーベルの恩師や知人たちをも襲った。ニコロビウス(Nicolovius)は、教育局を譲り渡さねばならなかった一彼の職位には、最悪の扇動家迫害者フォン・カンプツ(von Kamptz)がついたが、彼はそれ以外にも、警察省でポストをもっていた。大学での募金を通じて、宗教改革300周年を機に、ルターの末裔の2人の少年を教育することによって、カイルハウに「生きた記念碑を」というフレーベルの計画を支持したのは、フレーベルの恩師バイス(Weiß)鉱物学教授の他に、とくにシュライエ

ルマッヒェアーとデ・ヴェッテ(de Wette)神学教授だった。シュライエルマッヒェアーは、1817年には、政治（国家哲学）について講じる権利を奪われた。彼は、1822年には、とりわけ、彼の進歩的政治的見解および諸大学へのその普及、そして、体操やブルシエンシャフトの支持を理由に、告訴された。デ・ヴェッテは、ザンドへの母親への手紙のなかで、彼女の息子への共感を述べたことが原因で、大学での職を追われた。

これらの扇動家迫害は、とりわけブルシエンシャフト自身に向けられた。彼らの内、数百人が投獄され、少なくない人たちが亡命し、他の人たちは、公的学校では活動が不可能なので、私的な教育舎でその進歩的な教育理念の実現を試みた。反動は、いかなる危険が、自らに対して、これらの学校の存在から生じるかをすぐさま認識した。

「このように孤立した学校は、ここ数年来、公的な学校が、国家の緊密なコントロール下に置かれて以来、これ（ブルシエンシャフトなど一筆者）との結びつきにとって、特別な価値を有し、とりわけ、その有害な主義を広める手段となっている」と、1824年2月8日のプロイセン閣僚フォン・シュックマン(Von Schuckmann)の書簡にある。

この手紙は、シュバルツブルク＝ルードルシュタット政府に向けられ、フレーベルの「扇動者の巣」を観察することを求めた。疑いなく、プロイセン反動は、フレーベルが、本来の「ワルトブルクの英雄」、「イエナ大学の全く民主的な教授」であるローレンツ・オーケン(Lorenz Oken)と親密な関係にあったことを見逃してはいなかった。オーケンは、「科学的ジャーナルと、政治的新聞と、風刺雑誌をミックスした」彼の雑誌『ISIS』で、ブルシエンシャフトやワルトブルク祭を支持しただけでなく、1821年から1824年にかけて、フレーベルの論説を公刊した—だからそれは、オーケンがISISの出版を終えるか、教授職を放棄するか二者択一に立たされた時の後だ—1819年、彼は教職を断念した。そして、ワイマールで出版が禁止されたので、今や、ライプツヒヒのみで雑誌が出版された。疑いなく、フレーベルとオーケンは、お互いの教育観においても、精神的な結びつきを感じた。オーケンは、博物学を使って、「全面的教育に向けて国民を高めること、とくに本当のヒューマニズムにむけて教育すること」に努めた。

ユリウス・フレーベルによれば、カイルハウに出入りしたブルシエンシャフトのリーダーたちに、バーロップも属した。彼は、迫害を逃れるために、チュービンゲン大学への旅行中、1823～24年にカイルハウで、おじミッテンドルフのもとに途中滞在した。1824年12

月 12 日、バーロップの旅券を差し押さえ、ハレのブルシェンシャフトについて彼に尋問することを求めるシュックマンの追加書簡が追っかけてきた。この書簡では、次のことが指摘されていた。「このような秘密結社に加わったような個人は、公職から閉め出されて当然だが、少なくとも、教職に採用されることは、充分考えられることだ……」。そして閣僚の彼は、「このような学校からこのような野郎」が、排除されることを疑ってはいなかった。バーロップは、3 ヶ月間の禁固刑の判決が下され、1825 年に、ヴィッテンベルクで刑に服した。それから 1826 年にとうとう、教師としてカイルハウに行った。このような「ブルシェンシャフトのリーダーたち」には、とくにヴェッセルヘフト(Wesselhoeft)兄弟がいた。彼らのうち、ロベルト(Robert)とヴィルヘルム(Wilhelm)は、ともに、イエナの本家ブルシェンシャフトの設立者であり、1817 年のワルトブルク祭の指導者だった。彼らはまた、熱狂的な体操者でもあった。シュバルツブルク＝ルードルシュタットの秘密の市評議会は、1824 年のはじめ、カイルハウの教師リストを要求した。というも……

「フリードリヒ・フレーベルのいわゆる一般ドイツ教育舎には、ブルシェンシャフトとの結びつきに、特別な比重が置かれているように思えるからだ。また、その教育舎の多くの者が、例えばヴェッセルヘフトのような、ハレ等の危険な学生たちと、たくさん交流をもったからだ」。

ロベルト・ヴェッセルヘフト(Robert Wesselhoeft)は、カイルハウに長い間いたのだろう。3 番目の兄弟エドゥアルド(Eduard)は、1823 年 5 月 8 日に、ニュールンベルクからフレーベルに手紙を書いたが、そこからわかることは、彼もまたカイルハウにいたこと、そして、ディットマール(Dittmar)の場合のように、かつての「ドイツ同盟」のメンバーとの交友を再び始めたということである。当初、フレーベルの学校は、その当時の、反動によって政治的に迫害された者の避難所だったのである。

さらなる警察的措置が、教育舎のメンバーに対して始められた。だが、求められた教育舎の調査は、ルードルシュタットの宮廷説教師ツェー(Zeh)によって実施されたが、かかる理由からまた、教育舎のために中止となった。教育舎では 50 名を越える生徒たちが教育を受けた。だが、多くの親は一貴族、官吏、ブルジョアが子どもを退学させた。教育舎は深刻な危機に陥った。今や生徒はせいぜい 5~6 人となった。

ほとんど同じ時期、1824 年 2 月 6 日、プロイセン政府は、フランクフルト・アム・マ

インの役所に、ゲオルク・ブンゼン(Georg Bunsen)博士の私的教育舎を監視することを求めた。というのも、そこで活動している教師たちが、元ブルシェンシャフトとして秘密結社を設立し、それ故逮捕されたからだ。1823年5月11日、ブンゼンはフレーベルと彼の同志に宛てた手紙の中で——その際、親密な「Du」を使っている——共同行動へと誘った。あらゆる監視にもかかわらず、ブンゼンの学校の教師たちは、1833年に、「フランクフルト番人塔」(Frankfurter Wachensturm)のメンバーとなったが、その挫折は、小市民民主主義とその秘密結社にとって敗北を意味した。

いかにフレーベルが「ブルシェン体操者」と親密な結びつきを感じていたかは、1831年の「カイルハウへの女性たちへの手紙」のある箇所から明らかになる。彼はそこで、多くの人が、あまりに若く、「あたかも近世の殉教者のように…死んでいった、いな、殺された」ことを悔やんだ。彼は、とくにケルナー(Körner)やフリーゼン(Friesen)とならんで、とりわけザンドもあげた。そして、さらにヤーンやベッツシュタイン(Wetzstein)ような人たちをあげた。「彼らは、よりよきものを求めて闘ったため、最小でも、没落させられた」。

フレーベルは、「お上」と結びつくことを嫌がって、いわゆるヘルバ＝ブランを諦めた後、彼は1831年にスイスへ移住した。スイスで彼は、ヴィリサウ、ヴァルテンゼー、ブルクドルフの教育施設を経営した。カイルハウからは同志がくっついてきた。ここスイスで彼は、ドイツでは望むべくもない、政治的精神的に自由な場所を発見できると期待した。1831年、フレーベルは、スイスから、カイルハウにまだ留まっている友人に手紙を書いたが、それは、ドイツにおける市民的変革過程の困難さについての彼の深い洞察を示した。

「見たまえ。ドイツの永遠の領土分割や分断を。永遠に引かれた市場や関税の境界線を。例えば、商売や営業においてだけではなく、否、生活態度や、センス、思考、行動において。そんなことがいったい我々にとって、何の助けになってるというんだ。有能な生徒をもったとしても、生活の状況や国の状況が、生徒に対して、精神や心情や行為のあらゆる揺れを制限しないなんていうのか？その生徒がカイルハウを卒業しても、ここで、彼は実際に、思考、創造、活動において自由に振る舞えるというのか？」

しかし、スイスでも、フレーベルはプロイセン反動による迫害を受けた。その迫害は、遠く離れたカイルハウ教師ツリースト(Triest)にも、ブルシェンシャフトへの関与を理由

に向けられた。また、ヤーンと最も深く結びついていたカイルハウ人の一人で、かつてのカイルハウの生徒カール（エリアス）・シェップパッハ（Karl(Elias)Scöppach）にも向けられた。シェップパッハは、ヤーンの『馬齢を重ねたドイツ人もしくは旅人の思い』（Denknisse eines Deutschen oder Fahrten des Alten im Bart）を、この体操の始祖の口述をちゃんと筆記して、1835年に出版した。さらに、かつてのカイルハウの教師ヘルツォーク（Herzog）による敵視や中傷がなされたが、それに対しては、1832年に、ランゲタール、ミッテンドルフ、バーロップ（「同志で、フレーベル先生不在の一般ドイツ教育舎校長」）が、それに関する証拠材を公表することによって反駁した。

スイスの正統主義的（オーソドクス）な聖職者の攻撃はより重大だった。フレーベルは、1833年に、既に1830年末に書いた『人間教育の概要』を印刷することで、それに答えた。1830年10月21日、オーケンへの手紙でフレーベルは、20年代の初め、『ISIS』で公表することで支援してくれるということ、もう一度、熟考し、そして、『フリードリヒ・フレーベルによる全てのドイツ人の共同で統一の仕事、人間教育』というタイトルで草稿した彼の最新の著作を、全部が抜粋で刊行することを提案した。フレーベルは、印刷されたパンフレットに、彼特有の日付の書き込みによって（「偉大な諸国民戦争の記念日と書かれたところへ、全てのドイツ人の日」と）、かのドイツにおける市民的変革の最初の段階での最も重要な歴史的事件と彼との結びつきを告げたように、著作の内容は、ドイツで解決されるべき国民的課題に対する彼の理解のみならず、30年代初頭の、フランス革命の影響や、それによって呼び起こされた革命的高揚や国民運動を教えている。そのことは、1836年への転換期に執筆されたが、刊行されなかった、彼の最も重要な社会批判書の一つ『新しい年1836年は生命の革新を要求する』にも当てはまる。彼の考えによれば、ドイツには、彼が思い浮かべるような、家族のための諸条件がなかった。まったく1805-06年のように、彼は、自らと同志のために、彼によると、彼らがまだ保持している市民的でリベラルで民主的な施設を伴って、北アメリカの合衆国への移住の可能性のみを見た。この地で彼は、「政治的、経済的、社会的関係への不満」から逃げ道を探し求めた幾千のドイツ移民と同様に、自らの理想と希望が実現できると思った。アメリカにおけるドイツ人の発達や、その教育についてのフレーベルの考えは、1819年の、急進的革命家ブルシェンシャフトのリーダー、カール・ホーレン（Karl Follen）の『北アメリカにおけるドイツ教育舎計画』を強く記憶している。だがこの著作に対してフレーベルはここで、もう一度、彼によって求められたドイツにおける市民民主主義的国民教育は、「発達に即して教育す

る人間教育」についての彼のヒューマニスチックで民主的な根本理解に適応されるか、従属される場合にのみ、可能であることを示した。彼と親しかったフランケンベルク家の構成員が、北アメリカへ移住したときでも、フレーベルは、多くの理由から一家庭的な理由からもドイツへ戻ることを、そして、上述の著作ではめかした可能性、つまり、家庭教育をサポートすることで社会状況を徐々に変化させることを用いることを決めた。彼の『日曜誌』は、1836年から、「チューリングンの森のブランケンブルクやカイルハウ、ベルン州のブルクドルフ、オハイオ州のコロンブス」と場所を記載しながら、「ドイツ、スイス、北アメリカで、統合された家族」の作品として、発行された。

3. 市民民主主義革命成熟期における、フレーベルと敵対グループや個人々人との関係

30年代や40年代には、産業革命の広がりとともに、ブルジョアジーが野党勢力として益々強く現れた。ブルジョアジーは、リベラリズムとともに、イデオロギーを成長させたが、そのイデオロギーでブルジョアジーは、経済的、政治的、教育的領域でも自らの要求を主張した—それについては、ハルコルト(Harkort)やマーガー(Mager)そして様々な憲法学者を参照されたい。小市民民主主義的運動の代弁者は、空想的社会主義的・共産主義的理念の影響や、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争が始まるなかで、「労働者階級の社会的問題を深く考え、搾取される人民のために、政治的変革による社会的解決を待ち望んだ」。彼らは、「都市と地方における人民大衆の利益を表現し」、「封建制に対して、また資本主義的搾取の影響に対してもすでに向けられた小市民的社會改良主義」を、イデオロギーの立場として成長させた。そのことはフレーベルにもあてはまり、彼の膨大な書簡、1845年の「共産主義に関するレポートの著者へ」や後の著作と同様に、彼の著作1835/36の『生命の革新…』で明瞭となる。1844/45年、彼は、北アメリカへの移住をもう一度、考えた—彼にそう思わせたのは、きっと、彼の遊具やそれに付随する使用書さらに『母の歌と愛撫の歌』の販売での失敗や、並びに、フレーベルの社会改良的事業「ドイツ幼稚園」の株券の販売許可をめぐる示された、プロイセン政府の相変わらず、少なくとも、拒否的な態度だ。悪名高いプロイセンの閣僚アイヒホルンは、申請書を拒否した。プロイセン政府のこの態度には、多分フレーベルによって書かれた書簡の文体も少なからず、きっと、寄与した。たとえフレーベルが、1817年の彼の「生きたルター記念碑」設置に対して、プロイセン国が助成金を与えてくれたことを引き合いに出したとして

も（プロイセン王も、相当な金額を献金した）、多くのパッセージが、古いリュッツォー者、「扇動者の巢のカイルハウ」の校長を明らかにした。彼は、『ドイツ幼稚園』のなかで、「ドイツ人の子どもたち、ドイツ民族の子どもたち、全てのドイツ中の子どもたち」について書いたのだから。ミッテンドルフは、ドイツ幼稚園が「彼の根本思想によれば、全ドイツを包括しているが故に、プロイセン国をも」組み入れることになると補足しながら、この市民的国民的目標設定を和らげようとした。「あらゆる身分の高貴で名門の婦人たちが、「ドイツ幼稚園」の思想に加わってくれればというフレーベルの言葉を、アイヒホルンは、少なからず、「デマだ」と言及したに違いない。

40年代半ば以降、成長する政治的活動の一層の広範なサークルがみられた。市民集会や国民集会が開催された。野党勢力は、教育組合（Verein）、読書会（Gesellschaft）、体操・唱歌・射撃協会のような非政治的合法協会について、「よりたくさんの住民サークルの政治的啓蒙や動員の手がかり」を見出そうとした。これらの組合に、我々は、教師のそれも数えねばならない。「抑圧の時代にとどまるところなく表れる、自由と自立への衝動は、過ぎ去った年（1847年一筆者）に、学校の生活をも特徴付けた」と、ナッケ(Nacke)は、1848年、自らの『ドイツ国民学校教師のための教育年報』の序文に書いた。彼は、「国民の福祉のために大きな学院の代表者たちが」立ち上がったこと、それは学校の死活問題つまり、学校がいかに「最も自由に」成長できるか—だったこと、「この問題は、学校のあらゆる友人のこころを動かし、彼らを著作や言葉で態度表明するように突き動かし、彼らに、直接間接の禁止にもかかわらず、小さな集会で会議を開く勇気を与えた」ことを指摘する。この教員運動の頂点に、アドルフ・ディースターベーク(Adolph Diesterweg)とカール・フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ヴァンダー(Karl Friedrich Wilhelm Wander)が立脚するが、この似た別々の教育者は、1848年以前に迫害された。

この運動に、我々は、40年代のフレーベルの活動も組み入れねばならない。彼の社会改良事業「ドイツ幼稚園」は、—1817年のルターのときのように—1840年のグーテンベルク印刷術発明400年祭に「生きた記念碑」を据えるために、婦人組合設立への呼びかけとしてあらわれた。1840年5月8日のフレーベル、ミッテンドルフ、バーロップによって署名されたイエナのシャイドラー(Scheidler)教授宛の書簡では、大事なことは、「就学期までの子どもの生活の養育のためのドイツ婦人組合と印刷術発明400周年祭という今日の祭典の考え」だったと、きっぱりと書かれている。1845年、フレーベルは、「みんなの課題を、みんなの共同の力で解決」する教育を行うために、「教育組合結成のためのド

イツの男性と父親への呼びかけ」を公表した。彼は、友人のレオンハルディ(Leonhardi)に、この組合の設立は、社会的関係に立ち、組合は「実際に、教育や家庭教育の改善ならびに、公共の、市民の、もしくはおそらく社会の改善」を導くに違いないと書いた。ここにおいてもまたや、フレーベルの、社会変革過程における教育の過大評価が明瞭となる。彼の教え子、カール・ヴィルト(Carl Wild)は、それ故、まさしく、1846年1月にフレーベルに次のように宛てて書いた。

「謹賀新年を、私は、あなたに、愛するフレーベルに、そしてあなたの功績に送ります。内心の幸福のための、魂の平安のための礎石は、たしかに、実際に、理念のために生きている人のなかに、それ故、あなたの中にも築かれています。しかし、外的状況は一合自然性の教育の理念が、最も幼い児童期から、人生において、力強い形成を獲得する状態になることを、まず、望みます。しかし、そのことは、もちろん、その他の、現今の、まだ非常に病的な我が人民の状態と、関係しています。まさに合自然的な青少年教育が、全ての人民の生活を力強めねばならないことは、正しいのですが、さらに、かかる自然力の教育は、一般的に、次の場合にのみ為されることが可能なのです。つまり、政治的、社会的、教会的側面に向けての、このドイツ人民の徹底的な改造が、来る事件の権力や、刺激された人民自身の渴望によって、先行しているときです。このことは、必然的に、相互に関連し合っているのです」。

フレーベルは、次の年以降、おびただしい講演旅行を行い、カイルハウやバート・ブランケンブルクでの彼の幼稚園教員コースによる中断はあったが、その間、彼は大小のサークルで話した。講演旅行は、上述した一般的な政治的運動や、特別な教員運動に調和している。

「旅行メモ」と題したテープ状の紙に、フレーベルは、場所と人名をメモしていた。マゲデブルクのところで、我々は一☆印によって特に強調された—「ウーリッヒ牧師(Pastor Uhlich)」の名を見つけるし、ライプツヒのところでは—アンダーラインによって同様に特に強調された—「ロバート・ブルーム」の名前を見つける。これらの書き込みは、フレーベルと彼の仲間が、40年代半ば以降、いわゆる光の友、後の自由教団(Freie Gemeinde)の小市民民主主義的運動や、ドイツカトリックの同一運動との関係にも踏み込んだことをはっきりと証明している。これらの両グループは、特定の、ときにはあらか

る問題に、共同で取り組み、1850年以降は、連合して「自由教団宗教協会」(Religionsgesellschaft freier Gemeinde)となったが、プロテスタントないし、カトリックの教義(ドグマ)との関係を絶った。宗教的な野党運動の急激な膨張は、「増大する一般的な不満足の出発であり…それは、反封建的野党のリベラル左派や民主派のための集結場となった」。それらは、エンゲルスが断言したように、他の諸国でと同様の運動で、宗教的野党のマスクをつけながら、「世俗的権力に対する危険な世俗的野党」を具現化し、宗教的形態では、「かの日のもう一つの政治的理念、ドイツ統一の理念」を主張した。また、多くの国民学校教師がこの運動に加わった。光の友のリーダーは、とくに、40年代の終わりに、罷免ないし認証されなかったハレの牧師グスタブ・アドルフ・ヴィスリセヌス(Gustav Adolph Wislicenus)、マゲデブルクのレベレヒト・ウーリッヒ(Leberecht Uhlich)、ノルドハウゼンのエデュアルド・バルツァー(Eduard Baltzer)ならびに、ケーニヒスベルクの私講師フリードリッヒ・ユリウス・レオポルト・ルップ(Friedrich Julius Leopold Rupp)やマールブルクの教授カール・テオドール・バイルホフファー(Karl Theodor Bayrhammer)であり、ドイツカトリックでは、ライプツィヒのロバート・ブルーム、さしあたりシュレージェンのヨハネス・ロンゲ(Johannes Ronge)、ドレスデンの教授で速記学校校長のフランツ・ヤコブ・ヴィガード(Franz Jacob Wigard)だった。ヴィスリセヌスは、バーロップとともにハレのブルシェンシャフトのリーダーの一人だったが、それ故、1824年に12年の禁固刑を言い渡され、1829年に恩赦された。二人は互いに手紙のやりとりをしていた。彼に対する取り調べの間、ヴィスリセヌスは、1845年5月15日に、バーロップに宛てた手紙のなかで、「今や、とにかく…我々は、不幸な奴隷であることを、思い起こさせられる」と書いた。これら人間的繋がりと並んで存在したが、とくに、フレーベルによって主張された汎神論(万有在神論)、彼の宗教的寛容ならびに、教育を越えて、社会状況の変化を達成しようとする彼の努力だった。これらは、ユダヤ人をも仲間に出来た自由教団やドイツカトリックの意に沿っていた。自由教団やドイツカトリックは、彼らの側で、フレーベルの発達に即して教育する人間教育を普及し、幼稚園を設立した。その際、特別な功績を得たのが、この教団の構成員ルドルフ・ベンフェイ(Rudolf Benfey)でありヘルマン・ペーシェ(Hermann Pöschel)だった。ペーシェは、ノルドハウゼンの教師として1850年に、フレーベルの努力に注意を促され、このような関係を結んだ。彼らはフレーベル死後も、彼の理念を、様々な出版物で宣伝した。フレーベル自身は、自由教団の指導的主唱者と親密な関係にあった。1845年5月15日の手紙で

彼は、ヴィスリセヌスやウーリッヒとの出会いについて述べ、両者を特徴付けようとした。同じ年、彼はクリスマス祭をウーリッヒのところで過ごし、1846年、ハレの自由教団の行事に参加した。そして、そこで、ふたたびヴィスリセヌスやウーリッヒやベンフェイと再開した。

フレーベルは、多くの有名人や有名でない人と接触した。ハイラントは、公となったフレーベルの649の書簡を証明し、E・ホフマンやR・ベヒター(Wächter)が、1983年に、1700のフレーベルの書簡の年代リストを、彼の遺稿から出版することを意図したことをほのめかした。特別に関心があるのは、当然ながら、個々人に関するだけでなく、とくに、政治や、教育や他の出来事との関連における手紙のやりとりである。この点に関しては、ほとんど、書簡ないし書簡下書きの刊行や、自己の手もしくは他者の手の複写による刊行がない。

40年代、フレーベルの通信は、とくに、彼の遊具や「ドイツ幼稚園」を宣伝する目標があった。その際、彼は、支配状況に敵対する勢力だけでなく、例えば、「ドイツ幼稚園」の株を買ってくれた人のリストにあがるような王侯、貴族、高級官僚などにもお願いした。彼の理念が広く受け入れられるためには、彼にとって、あらゆる手段は妥当だったが、そこには、彼の、小市民主義を特徴づける、かの優柔不断な態度が現れていた。1984年に、ザルツマンのシュネップフェンターラー(Schnepfenthaler)学園が、創立200周年を祝賀するが、シュネップフェンターラーのザルツマンも、株への応募によって、フレーベルの仕事をサポートしたということは、おそらく、興味を引かずにはいられない。当時の校長で、学園創立者の息子カール(Carl)・ザルツマンと彼の妻は「また、親戚のように一次のような言葉でもって、株を申し込んだ。「…組合のメンバーに対する個人的な高い敬意から、フレーベルの教育方法の精神や影響を承認することから」。

以下で、フレーベルと、当時の進歩的人間との若干の結びつきが示されるはずだ。最も有名なのが、フレーベルと当時の若い市井の学者カール・ハーゲン(Karl Hagen)との文通である。フレーベルは、1844年夏の南ドイツへの宣伝旅行で、ハイデルベルクで、彼と知り合った。ハーゲンは、フレーベルの考えに感激し、この「古いリュッツオー軍人」を他に紹介し、1845年には、『ヴァイル立憲主義的年報』や彼自身の著作『時代の課題』の第2部で、論文「国民教育について、とくにフリードリッヒ・フレーベルの制度を考慮して」を公表した。エリカ・ホフマンは、現存する手紙の交換、2通の推薦状、ハーゲンの論文を編集した。ハーゲンはマルクスとも結び付いていたが、1845年には、歴史の

教授となった。1848/49年には、彼はフランクフルト国民議会で、「最左翼」(ドンネルス議員団)とシュテュットガルトの残余議会(Rumpfparlament)に所属していた。彼は迫害され、ハイデルベルクの教職をなくし、1855年になってやっと、ベルンで教授職をえた。

だからハーゲンとフレーベルの関係は有名だが、フレーベルが、1843年、彼の「ドイツ幼稚園」の宣伝の際に、バイスやシュライエルマッヒェアー、そしておそらくツォイネ(Neune)に宛てた書簡ないし書簡草稿から推察されるように、ベルリンの恩師をも思い出したことはあまり有名でないだろう。シュライエルマッヒェアー夫人の甥—ルドルフ・ユスト(Rudolf Just)、1838-1843年のカイルハウの生徒—が、ベルリンに帰省するとき、フレーベルは、彼に、上述の手紙と、彼のパンフレット『ドイツ幼稚園の報告と弁明』のサンプルを、その時に、もたせてやった。そして—さる1817年の「生きたルター記念碑」の際のように—このグーテンベルクにささげられた「生きた記念碑」のための支持を懇願した。彼はバイスへの手紙で、大切なことは、「あらゆるドイツの子どもの養育と教育」であること、彼自身の努力は、「ドイツのリュッツオーのオークに由来する健康な力強い枝」であること、しかしながら、「その剣は…子どもを導く百合王」になっていることを述べた。他の箇所では次のように書かれている。

「かつて、ルターの記念碑を非常に力強く支持してくれたジューフェルン(Süvern)、ニコロヴィウス(Nicolovius)、ウーデン(Uhden)、サビーグニー(Savigny)(フレーベルに入学許可を与えた当時の総長—筆者)のような人たちがまだ健在ならば、今の企てを、彼らに理解させるように努力して下さることをお願いします」。

シュライエルマッヒェアーに関してフレーベルは、彼が、「幼稚園のことで面倒をみてくれた」ことに感謝している。ツォイネへの手紙(呼びかけは、高く尊敬するHochverehrter 総長先生!だった)でフレーベルは、同様に、ルター記念碑への支持で、シュライエルマッヒェアー、クラウス、バイス、ヤーン、ブラーマンを指摘した。

1813年の愛国者たちと一緒にだったように、フレーベルは、「ドイツ幼稚園」の設立に関して、再びまた、ブルシェンシャフト者と結びついた。ここでまず挙げられるのが、カール・ヘルマン・シャイドラー(Karl Hermann Scheidler)だろう。フレーベルと同じく、リュッツオー義勇軍の志願兵で、ヤーンと面識があり、1815年、イェナ・ブルシェンシャ

フトの11人の設立者に属していた—ここで彼は、後のフランクフルト国民会議議長のハインリッヒ・フォン・ガーゲルン(Heinrich von Gagern)と知り合い、「両者は、『戦友』として生涯にわたる友情の絆を結んだ」。シャイドラーは、1817年のワルトブルク祭の組織者の一人だった。彼は、「城主」(Burgvogt)として、イエナのブルシェンシャフトの剣を手に、ほとんど全てのドイツの大学からあつまった学生の隊列をリードした。彼も、反動によって迫害され、それから、イエナ大学の私講師として腰を下ろし、1836年、当地で、正教授となった。三月前期、彼は進歩的で政治的な著作者であることが確認された。彼は、高等教育学の領域で、特別な功績を得た。1841年、彼は、カール・マルクスに「不在」のまま博士号を授与した哲学部の教授となった。フレーベル、ミッテンドルフ、バーロップによって署名された1840年5月8日の手紙で、彼らは、子どもの養育者などの養成についての1839年の自分たちの計画を支持してくれたことに対して、シャイドラーに感謝し、彼に「就学期までの子どもの生活を養育するドイツ婦人組合構想」を説明し、精査のために概念図を送り、その中で、彼らは次のように述べた。

「私たちは、あなたに、同封した、査定のために提示された企画を実施するにあたり、成果があることを最大の確信をもって述べます。その成果は、あらゆる方向に向けられたあらゆるドイツの努力の、本来の、最終的で、最内奥の関係点を満たすものであり、真のドイツ的意味をもち、ドイツの精神で、それ故、真に祖國的で、民族的で、十分な同時代的努力が表われています」…手紙の他の箇所では、「ドイツ的心情、ドイツの力そしてドイツの精神をもって、男の、そして友情の手を、確固たる、持続した、速やかで、生命に満ちた実行のために私に、そして私たちに差し出してください…」と、書いてある。

フレーベルとシャイドラーの文通から明らかなように、シャイドラーは「フレーベルのこと」を推薦した。シャイドラーの妻も、株を申し込んだ最初の人たちに属した。

イエナ大学の最も有名な教育学者、ヘルバルトの弟子カール・ホルクマル・シュトイ(Karl Volkmar Stoy)ともフレーベルは、結び付いていた。1845年10月23日の書簡でシュトイはバーロップに、「フレーベル先生がいらっしゃるかどうか、ミッテンドルフ先生がまだ私を覚えているかどうか」を、彼は分からないから、ハノーバーからの志願者に、「フレーベルの遊びのシステムを修得することを」可能にするようお願いした。さらにそ

れ故、彼は、遊び箱の値段と概要を教えるように頼んだ、というのも、「私はここで幾つかを実演しようと思うからです」と書いた。シュトイは、1843年から私講師、1845年から非正規教授となったが、1843年には「教育学協会(Pädagogische Gesellschaft)」を設立した。同協会は、1844年には「教育ゼミナール」に転換され、同年に彼は、私立の少年教育舎(Knabenerziehungsanstalt)を引き受けたが、それを彼は実習目的に利用した。1844年には、師範学校としてのいわゆる無料学校(Freischule)の女子科(Mädchenabteilung)が、彼に委ねられた。シュトイのフレーベルの遊具への特別な関心は、疑いなく、この女子科を引き受けたことと関係していた。1848年、シュトイは、私講師、非正規教授そして正規の客員教授からなる、大学規約の民主化を求めた「大学改革組合(akademischen Reformverein)」の頂点に立った。

このような人に、さらに、有名なイエナの教授の一人が考えられるというのが、彼も、フレーベルの努力を支持した。農業実習兼研究農園の設立者フリードリヒ・ゴットリーブ・シュルツェ(Friedrich Gottlieb Schulze)だ。1840年5月9日の書簡で、フレーベルはシュルツェに、「深部に基づいたドイツ国民教育」への彼の協力に感謝し、「地主や農夫たち」のなかであって、「ドイツ幼稚園」のために尽力するように頼んだ。シュルツェは、1840年6月12日の手紙で、幼稚園を支持することを確約し、カイルハウ学園の目標に完全に合意していることを打ち明けた。「というのは、私は、それを、将来農業に就こうとしたり、高度な学問研究を通じてこの職業に有能でありたいと望む若い人たちの準備に対して、相応しく優れているとみなしているからなのです」。彼の妻も、娘も、株を取得した。1843年6月7日の書簡でシュルツェは、彼の息子がカイルハウを訪問するであろうことを伝え、イエナ近郊のツベッツェン(Zwätzen)で領地を獲得後、1844年に、彼の農業施設に「1. 農業学校、2. 兵営学校、3. 児童保護施設」を附設する計画について述べた。だが、彼の死の直前になってはじめて、わずかに、ツベッツェンに、ある種の農業職業学校「畑作学校(Ackerbauschule)」を設立出来ただけだった。

なおもっと追究されなくてはならないブルシェンシャフト者との新たな結びつきは、後に有名となる田園小説作家ベルトホルド・オイエアーバッハ(Berthold Auerbach)、元の名モーゼス・バルーフ(moses Baruch)とであった。彼は、ブルシェンシャフトに属していたことからミュンヘン大学を退学となり、その小市民的でラジカルな考えから迫害され、1837年には、しばらくの間、ホーエンアスペルグ(Hohenasperg)に投獄された。彼の特別な功績は、常に、ユダヤ人の同権に味方して、封建的偏狭さに反対して、USA

の奴隷売買に反対して尽力したことにあった。1844年、彼はフレーベルに相談した。1847年にフレーベルは、オイエアーバッハに手紙を書き、彼を「わが愛する代父(Mein lieber Gevattersmann)」と呼びかけた。そしてそれによって、オイエアーバッハが広く流布させた人民カレンダー「代父(Gevattersmann)」(1844/47)をほめかしていた。フレーベルは彼に「20の計画」を送った一きつと、カレンダーの利用について考えて。ユリウス・フレーベルは、1848年、ウィーンでの10月闘争の間、オイエアーバッハと出会った。

フレーベルの努力を支持した他の文学的企業、すなわちヒルドブルクハウゼン(Hildburghausen)の「書誌学院(Bibliographisches Institut)」の民主的リーダーとフレーベルの結びつきは、疑いなく特に重要だった。ヴァルター・ハッケル(Walter Hackel)は、年報『貧しい子のためのクリスマスツリー』を通じて、「一方では、出版者ヨーゼフ・メイヤー(Joseph Meyer)と、編集者フリードリッヒ・ホフマン(Friedrich Hofmann)の間に、他方では、フリードリッヒ・フレーベルとフレーベルの友人で協力者であるヴィルヘルム・ミッテンドルフの間に、人間関係が発展し、それはミッテンドルフの死まで続いたことを証明した。1847年10月18日のホフマンへの返信でフレーベルは、支持を感謝し、全ドイツ中での「人間教育」にとって、『クリスマスツリー』ならびに、幼稚園の重要性を強調している。そして、「ヒルドブルクハウゼンの遊戯学校(Spielschule)が、幼稚園に昇格された」喜びを感謝して述べている。

ここで、1848年前の進歩的同時代人とフレーベルの関係についてあげられるべき最後の実例は、家族的絆と関わりをもち、同時に、1848/49年の革命期に通じていく。1847年1月9日、フレーベルの甥ユリウスは一自らの兄弟カールやテオドールと共に、一般ドイツ教育舎でフレーベルの最初の生徒の一人—革命ではドイツ国民会議左翼の代表者として、重要な役割を演じたということだが、叔父に手紙を書いた。手紙に彼は著書(疑いなく彼の『社会的政治制度』2巻本)を同封した。ユリウスは、彼が、ドイツヘーザクセンへ帰ってきていること、しかし、「プロイセンによって、ここから私の追放が求められているという場合…」カイルハウに行きたいことを報告した。またもや、扇動者迫害の時代のように、カイルハウは、迫害された者の避難所として選び出されていた。それから、我々にとって重要な章句が続くが、そこには、贈呈された本と関係して次のように書かれている。

「だが、もしそこに、多くの理念や実行の自主性があるのなら、私は、このことの大部分は、あなたの教育のおかげと全くもって認識しています。ところで、あなたが私たちの人生のまさに分岐路にあたって、よく予期した以上に、私は、このあなたに対する精神的関係をより完全に、より嬉しく承認している証拠として、この本をお受け取りください」。

1848/49年の革命前と最中の小市民民主派としてのユリウスの活動に関して、彼は、既にここで、「革命的精神の温床」としてのカイルハウに関して、後に自ら下す評価を確かなものにした。

1846年9月のパリからの書簡で、エンゲルスはブリュッセルのマルクスに述べた。「…だが、一つの事実は、あらゆる今日までの、もっぱら、ただ特別に、禁止された著述を扱う書籍商—フレーベル、ヴィーガント (Wigand)、レスケ (Leske)—がとうとうだめになったことだ…」。フリードリヒ・フレーベルと、ダルムシュタットの書籍商カール・ヴィルヘルム・レスケ (Carl Wilhelm Leske) とのいかなる結びつきも今まで確かめられていないが、ライプツヒの出版者で印刷者オットー・ヴィーガントとの結びつきはあった。彼は、なかでも、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』のドイツ語の初版を調達し、後には、『資本論』第1巻をドイツ語で印刷させ、1842年には、ヴァンダーの『国家施設としての国民学校』を刊行した。1848年、ロバート・ブルームと彼は、ライプツヒの民主派の頂点にいた。ライプツヒ滞在を機に、フリードリヒ・フレーベルは、ヴィーガントに伝言を届けさせた。そのなかで彼は、彼がオーケンの『ISIS』で刊行したものの一つについて、ならびに、同誌でのそれに関連するコメントと記事について述べた。「この乱筆に対するお許しを私は乞わねばなりません」との言葉でフレーベルは締めくくった。

さて、甥ユリウス・フレーベルについてだが。彼は1833年に教師兼大学教師としてスイスに行き、チューリッヒ人との婚姻によってスイス市民となった。40年代の最初に、学者から政治家—小市民的民主派になった。彼は、「チューリッヒとヴィンタートゥール (Winterthur) の文学支店」を引き継いだ。それは、後に、「ユリウス・フレーベル商會」へと改称された。ヘルweg (Herwegh) の『生あるものの詩』の出版で彼は、大成功をおさめた。J・フレーベルの出版社で刊行されたものは、彼の言葉によると、「ドイツでは何ら出版許可を得られない文学作品で、だから、許可を確実に得るためにチューリッ

ヒやヴィンタートゥールに逃げ道を求めた」。連邦議会決議によって、彼の出版社はドイツで禁止され、彼自身は、ケルン滞在に際して、プロイセンから追放された。ついに彼は、パリでの相応の取り決めに従って、カール・マルクスと、アーノルド・ルーゲ（Arnold Ruge）によって編集された『ドイツ-フランス年報』を刊行したが、それは、ただし、2号刊行されただけだった。ヴィーガントの勧めで彼は、ザクセンに行ったが、出版者としてさらに活動することなく、1846年から1848年までドレスデンに居住した。ここでほんのほめかされた事実はユリウスは、なお、さらに小市民民主派や空想的社会主義者とも結び付いていた—彼が叔父に書き送ったかの書簡の背景となっている。

次稿で課題となるであろうことは、1848/49年革命に対するフレーベルの姿勢に関して、彼自身の活動に関して、ならびに、彼の近親者や友人の幾人かに関してコメントすることである。それらを知ることは、反革命による彼への迫害をあらためて分かりやすくさせるだろう。

※本稿は、Helmut König; Friedrich Fröbels Verbindung zur kleinbürgerlichen Demokratie in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Teil I, IN: Jahrbuch für Erziehungs- und Schulgeschichte 24/1984, Berlin. を邦訳したものである。なお、紙幅の都合で、註釈は全て省略した。邦訳者は、1988年4月15日に、東ベルリン郊外のケーニッヒ教授宅で、彼から、当時のフンボルト大学指導教官レム教授の立ち会いの下、本稿の邦訳を快諾していただいていた。

ケーニッヒ教授は、当時の東ドイツ（ドイツ民主共和国）の教育科学研究の第一人者であり、マルクス主義、唯物史観的によって、教育史研究を行っていた。本稿も、フレーベルの教育思想、教育活動をマルクス主義の立場から論じている。

東西冷戦が終結し、東ドイツが1990年に西ドイツに併合されるかたちで消滅した。それ以降、教育学研究においても、マルクス主義や唯物史観は「前世紀の遺物」であるかのような扱われ方をするようになり、邦訳の機会を逸していた。だが、90年代に拡大する資本や金融のグローバリゼーションと21世紀型帝国主義戦争の影響は、政治、経済をはじめ、教育の分野にも多様で、深刻な影響を及ぼしており、かつて「善玉悪玉論」として揶揄された唯物史観が、再び、脚光を浴びつつある。

フレーベルが、人類教育史のなかで果たした進歩的役割とは何だったのか、保守・反動勢力との闘いのなかで、彼は、いかなるヒューマニスティックな教育活動を行ったのか。

このような視座からフレールベルを論究することは、日本における 21 世紀教育改革の課題をあらためて明らかにすることにつながるであろう。